
IS ~ インフィニット・ストラトス ~ とあるはみ出し者の物語

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） とあるはみ出し者の物語

【Nコード】

N4017Z

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

両親と共に飛行機テロに巻き込まれたが、たった一人だけ生還した少年。少年は聡明だった。だから、思った。『弾かれた』と。そして、少年は自らを『世界のはみ出し者』と自称した。というわけで、HDがクラッシュした作者がモチベ回復のために書いた奴です。主人公はISは使いませんが、それなりに強いキャラになると思います。例えるなら、ライダーマン。作者は特オタなので、どこかしこにそれ系のネタがありますので注意してください。

第1話 始まり（前書き）

あらすじにもあるとおりのおはなしです。

もちろん、他の小説も少しずつ書いているので「安心ください」。

……バックアップはこまめに取ったほうがいいですよ？

第1話 始まり

「父さん。この写真に写っている人って誰？ 父さんに似ているけど」

少年 桂はそう言って自分の父親に一枚の写真を見せた。そこには、自分の父親と顔が似ている男の二人が肩を組んで写っていた。

「ああ…これは兄さんだよ。まあ…もう十年くらい会ってないけどね」

父親はそう言って写真を懐かしそうに見ていた。桂はまだ小学生ではあるが、両親の血を受け継いでいるのか、勉強も運動も平均以上で聡明な少年だった。だから、父親の言葉に含むものを感じたが、聞くことはしなかった。だが、父親は肩をすくめて話し始めた。

「僕は…そうだねえ。桂なら分かると思うけど、ちょっと特殊な家の出身だね。まあ、特殊部隊を家業にしている家とってくれればいい。その宗家の次男坊だったんだ。今、桂に教えている体術とかもその家に伝わるものなんだよ」

「母さんもその家の出身なの？」

母親は生まれつき体が弱いが、元は国家レベルの研究に携わっていたという才女らしい。ならば、母親もその家出身かと思ったが父親は首を振ってその考えを否定した。

「母さんは、僕が家を出てから会ったんだ。丁度、僕が行き倒れそうなときにたすけてくれてね」

何でも、家業を兄弟のどちらが継ぐかで家が二つに割れそうになったため、兄に置き手紙を残して家を飛び出したのだが、すぐに路銀も尽き果て、ホームレスになるうかというときに不良に絡まれていた母親と出會ったらしい。

「まあ、兄さんは怒っているかもね。手紙だけ残して家業をほつぽり出したから。でも、兄さんと争うのは嫌だったし…丁度兄さんがロシアの特殊部隊隊長の娘さんと結婚しようとしていた時だったからね。幸せそうな二人を見てみると…ね？」

最初は政略結婚の予定で、自分が兄のどちらかと結婚することになっていたのだが、兄と彼女が仲良くしているのを見て自分がいないほうが余計な波風を立てないと考えたらしい。

「でも、そのおかげで母さんと会えたし、桂という息子を得ることができたんだ。兄さんには悪いけど、僕は今幸せだよ」

兄と連絡を取らないのは、家業を継ぐために共に努力をしてきたのに「兄弟で争いたくない」という甘い考えで逃げ出した自分を恥じてのことらしい。

「さて、そろそろ僕は仕事に行ってくるよ。桂も、そろそろ千冬ちやんたちが来る頃じゃないかな？」

「うん。父さん…別に恥じる必要はないと思う。きつとおじさんもそう思っているはず」

桂の言葉に父親はきよんとしていたが、しばらくするといつもの優しい笑みを浮かべて桂の頭を撫でた。

「ありがとう。そうだな…いつかは兄さんと会わないといけないな」

父親はそう言って仕事に向かった。桂はその後姿を暫く見ていたが、すぐに自分を迎えに来た幼なじみの二人の少女と共に学校へと向かった。

「桂：どうしたんだ？」

「はっ！ まさか、かつちゃんに春が！？ 誰だよ！ ゆる「そんな訳ない」」

桂が二人とあつたのは小学校の入学式。優秀な両親の影響なのか、すでに大学レベルの知識はあつた桂は、はつきりというなら達観していた。そのため、小学校で浮かれているクラスメイトを一步退いた目線で見えていたのだが、それに気づいて近寄ってきたのがこの二人。ほにやっとした感じの篠ノ之束が言うには「君は私と同じ感じがする」とのこと。

そこから、凜とした雰囲気、織斑千冬とも仲良くなり、今では結構仲が良い。

「父さんも苦勞していたんだなあと思っただけだ」

「健二さんが？ ひよりさんのお世話もあるから？」

「いや、そういう訳じゃない。人間、知らないところで苦勞しているんだと思っただけだ」

「ふん」

束は他者に対して排他的ではあるが、桂の両親は受け入れていた。特に、母親であるひよりに憧れている部分もある。

「あ、ならかつちゃん。今度、ひよりに会いに行きたいんだ。ちょっと、色々聞きたいことがあってさ！」

「ん？ まあ、電話で聞いてからになるとおもっが？」

「オッケー！ ありがとね！」

最近、束は何かに熱中している。千冬も関わっているらしいが、自分には教えてくれない。まあ、女同士の何かしらがあるのだからと考えていた。

「そうね……ここはこうすればいいんじゃないかしら？」

「なるほどー！」

ある休日の病院の一室では桂の母であるひよりと東が何かの設計図を片手に意見交換を行っていた。千冬はひよりにお茶を淹れながら話を聞いている。

「そう言えば桂はどうしたの？ 健二さんはお仕事だと思うんだけど」

「かっちゃんなら鉛入りのベスト着てランニングに行くっていったよー」

最近、夫である健二から色々話を聞く。自分がかつて所属していた対暗部用暗部『更識』で受けていた教育を桂に施していたのだが、まるでスポンジが水を吸うようにどんどん自分の物としていった。

それを聞いて、ひよりはやはり血が繋がっているものだと思った。

健二は今でこそ優しい好青年であるが、生まれは警察の公安のような暗部組織のため、身体能力も知識も高かった。それに、時折寂しそうな顔をする。それは多分、実家への負い目でもあり、兄への負い目なのだろう。暗部組織なら健二の居場所をすぐ探せるはずなのだが、見つかっていないのは健二が何らかのツテを使っているからなのだろう。

「……………男って不器用ねえ」

「「??？」」

まだ「少女」である二人にはそこから辺は分からないのだろう。そう思いながらひよりは『インフィニット・ストラトス』と銘打たれた設計図の添削を始めた。

「……………剣道じゃないんだね」

「うん。まあ、基礎を学ぶという意味では剣道もいいんだけどね。それに、これはどちらかと言えばタイ捨流に近いかな？」

仕事から帰ってきた父親と修行をしていた桂はふと質問してみた。今は木刀を使っているのだが、剣道などではタブーの足元への攻撃や、剣道などではありえない目潰しに蹴撃や拳撃などを使っている。

「『剣』のみに限定するのは及第点と教えられたんだ。まあ、極めれば関係ないかも知れないけどね」

「ふーん。まあ、言いたいことは分かるよ」

要するに剣は手段の一つなのだろう。まあ、それは暗部組織とか傭兵なら当然と思い桂は父親との修行を再開した。

そして、翌年にひよりの体調が回復したため家族旅行に行くことになった。最初は束が自分も行きたいとごねていたが、千冬に殴られ

て気絶していた。

「桂。おみやげを頼む。出来れば、一夏も食べられるような」

「一夏…ああ、あのちびっ子が」

一回だけだが、千冬の弟を見たことがある。ただドギツイ女難の相が出ていたのは気になったが。

「ああ。頼めるか？」

「大丈夫だ。任せておけて」

束にも土産を買ってくると約束して、桂は両親と共に旅行に出かけた。目的地はヨーロッパらしい。空港で見送った二人はどんな土産を買ってくるのかがすごく楽しみだった。

「でも、よく考えるとかつちゃんのセンスって……」

「そう言えばそうだったな」

家に帰った二人は、桂のセンスが悪いことを思い出したのだ。

例えば、台所に現れる『G』を凄い生き物と思っていたり。いや、実際に凄い生き物ではあるのだが、ありがたがるのはご遠慮願いたい。

「まあ……ひよりさんもいるし大丈夫だろう。健二さんは……分からないけど」

「あ……」

ぶつちやけ健二も同様にセンスがない。よく温泉街の土産物屋にある『根性』とか書かれたキーホルダーを買ってくるような人だ。

「……まともなものを期待しよう」

「そだね。とりあえず、さっさとISを完成させてひよりさんをビツクリさせよ〜っ」と

立ち上がった束を横目に千冬が何気なくつけたテレビにあるニュース映像が流れていた。

フランスに向かっていた旅客機が自爆テロにより墜落したというニュースが。そして、その旅客機は桂たちが乗っている便だった。

初めに目に入ったのは、黒焦げになりながらも自分をかばっている両親の姿だった。

鼻に入ってきたのはむかつくほどの肉の焦げた匂い。

耳に入ってきたのは、未だに燃え盛る炎の音。

「父さん……母さん」

自分は大丈夫だと告げようとしたら、二人はボロボロに崩れた。まるで、役目を果たしたかのように。桂は聡明だった。だから、両親が死んだことも理解したし、泣くこともなかった。そして、立ち上がると声が聞こえた。

「た……たすけて……」

「……」

そこに居たのは、旅客機が墜ちる原因となったテロリストの生き残り。はて？ 自爆テロを敢行したのに助けてくれとはコレ如何に？ 桂は無表情のまま手近にあった瓦礫をテロリストの頭の上に落としました。

「ぎゃぴ」

「

訳の分からない断末魔の声を上げてテロリストは死んだ。そして、ふと思った。もしかしてこのテロで生き残ったのは自分だけなのかな？と。

「生き残りは……いるかな？」

しかし、あらかた探しても生き残りはいなかった。全員死んでいる。何故か仲間はずれにされた気分である。

「……弾かれた？」

自分だけ『みんな一緒に死んだ』という事実から弾かれた様に感じた。無論、それは運が良かったのと両親のおかげなのだろうが、どうせなら両親と一緒に死にたかったと思う。でも、自分はこうして生きている。

「……」

桂は無表情のまま立ち尽くしていた。しかし、すぐに歩き出した。

弾かれた自分はこのにいる必要はないと考えて。

数時間後にレスキュー隊が現場に到着したが、生存者はおらず『乗員乗客・犯人含めて全員死亡』という発表がなされた。

第1話 始まり（後書き）

ぶっちゃけ、千冬や束とからませたのは色々なフラグ（恋愛的な意味ではない）のため。まあ、プロットでは千冬が片思いになりそうだけだね。

とりあえず、次回は更識へ……。

第2話 流されて更識

「君が健二の息子、かな？」

「……誰だアンタ？」

ドイツで出会った企業の社長という男の協力で日本に戻ってきた桂。しかし、戻ってきてても自分がふらりと現場から消えたので自分は死んだことになっていて居場所はない。そのため、とりあえず裏路地の不良などを潰してその日暮らしを行っていたのだが、ある日自分が根城にしている廃ビルの一室に一人の男が現れた。

「私は…更識楯無という。まあ…君の叔父といったところかな？」

「なるほど…アンタが親父が言っていた「自分にはもつたいない兄」ってか？」

「……弟の気持ちに気づいてやれなかったダメな兄だがね」

結構、この界限では有名になっていた自分。噂でしか知らないが外国で言うところの諜報機関である『更識』ならば調べられるかと結

論づけた。

「んで？ 何か御用ですかね？ 一応、俺は死んでいるんですが？」

戸籍上は死んでいるため、今までは闇医者とかに治療などは頼んでいた。もちろん金は、父親との特訓で身についた身体能力などを生かしたヤの付く自由業のお手伝いや、日本に戻るのに協力してもらった社長のコネを使っての便利屋の真似事などをして稼いでいた。恐らく、そんなことをしていたから見つかったのかと若干、自分の後先を考えないやり方に自己嫌悪。

「実は…君を『更識』に引き入れたいんだ。戸籍の方も、私の息子として作れるし」

「……それをやってアンタにメリットがあるのか？」

「……まあ、代償行為と思われても仕方ないかな？」

まあ、代償行為なのだろう。だが、桂はふと考える。最近、やはり肩身が狭くなってきた。後ろ盾がないことも関係しているのだろうが、やはり年齢がまだ中学生なのが問題だろう。そう考えるとこの話は悪いことではない。戸籍も偽造してくれる上に、『更識』という後ろ盾を得ることができる。それに、「弾かれた」と思っていた桂はこうやって受け入れてくれる人に甘えたい。

「そんなじゃ、お願いします。親父がどんな人間だったってのも聞きたいし」

「うん。それじゃあ…行くつか」

まあ、適当に楽しむかと思っていたのだが。

「おにいちゃん？」

「……当主。この二人は可愛いな」

「フッフッフ。ぜひともパパと呼んでくれ息子よ。まあ、それはそれとして見る目があるな」

ものすごく楽しんでいた。

「しっかし……まあ……まさか次期当主候補にするとはねえ」

「まあ、宗家筋だしね」

桂は『更識桂』として更識に入り、父親が現当主の弟ということ、桂自身が優秀なため現当主の子供を差し置いて次期当主最有力候補となっていた。

「ま、それでも納得はしない奴はいるわな」

しかし、ポツと出の桂がその場にいるのを嫌うものもいる。歳若い連中はそうでもないが、やはり中堅以上の人間は「家を捨てた男の息子が何故？」という気持ちだ。それを押さえているのは現当主である楯無にほかならない。

「私としては『実の娘』だからとか『長年仕えているから』とかの理由で次期当主を決めるつもりはない」

ここ数代は世襲制だったらしいが、それ以前は次期当主は前当主の指名制だったらしい。世襲制がいいのは分かる。実力による指名制ならば、その人間を嫌う派閥などでまとまりが取れない部分もあるが、世襲制ならば『当主の実子から』と納得できるし、波風もあまり立たない。

「ま、所詮ははみ出し者か」

桂の立ち位置は「『更識』を捨てた男の息子」である。だからなか桂は自らをはみ出し者と称している。だが、実際いくつかの任務を任せると完璧に仕事をこなしており、評価も年齢を考えると高い方である。

「すまん」

「いや、当主や奥方には感謝しているさ。戸籍も作ってくれたし、後ろ盾にもなってくれた。まあ、それだけでも大丈夫さ」

実際、当主とその奥方は桂の父親に負い目があったのか、自分に目をかけてくれて、今ではそれこそ冗談を言い合うほどに仲良くなっている。

「さあて、玉櫛と簪と遊んでくるとするか。つーか、俺としても次期当主は玉櫛がいいと思うぜ？ 所詮、俺は『更識』を捨てた男の息

子』だからな。そのほうが余計な波風を立てなくて済む」

「……………」

手を振って部屋を出て行った桂を見ながら楯無は息を吐いた。世襲制にすれば組織にいらぬ波風を立てる。それは理解している。だが。

「それで、大事な弟を失った……………健二」

自分と弟は正反対だった。自分が活発なら弟は寡黙。自分が感動的な行動を取るなら弟は理論的な行動といった風に。そして、互いに切磋琢磨して実力をつけていった。最初はどちらかが当主になるな

どは考えていなかった。だが、高校生になったときに父親に知らされた。

『お前たちのどちらかを次期当主とする』

その日から、周りの空気が変わった。自分を取り込もうとする分家の連中や外部組織。二人で修行をしていれば擦り寄って来る者も居た。

だが、ある日のことだった。協力関係にあったロシアの諜報機関の隊長の娘との婚約話が伝わった。こちらは次期当主が決まっていなかったこともあり、三人で過ごさせてそのなかで決定するという取り決めになった。

「えっと…ナスターシャっていの。よろしくね？」

「えっと…更識健一だ」

「弟の健二です」

そして、実際に顔合わせとなったが、自分はナスターシャに一目惚れした。彼女の顔を見た瞬間に自分の心臓がうるさくなった。そして、彼女も自分を見て顔を赤らめていた。思えば、その時から弟は

気づいたのだろう。自分たち兄弟は平等にナスターシャにアプローチする事ができたが、弟はそれとなく自分とナスターシャが二人になれるように動いていた気がする。そして、ある日の夜。健二に話があると呼び出された。

「兄さんは…ナスターシャの事…好き？」

すごく真剣な目で自分を見据えていた健二。自分は一瞬呆けたが、すぐに表情を戻して告げた。

「ああ。好きだ」

これは偽りない真実。自分はナスターシャが好き。すでに彼女にも告白しており、キチンとOKを貰っていた。健二は自分の返事に頷くと口を開いた。

「分かった」

そして、それだけ告げると健二は自分の部屋に戻っていった。恐らく、この時すでに健二は『自分がどうするべきか』分かっていたのだろう。自分とは違い、冷静に状況を把握する事に長けていた健二だ。

「健一。お前が次期当主だ。健二は…家を捨てた」

翌日、父親から告げられたのは健二が最低限の荷物だけをもって更識を出奔したという事実。健二の部屋へと走ると、そこにはナスターシャがいた。

「健一…これ」

彼女が持っていたのは健二が自分とナスターシャに宛てたと思わしき手紙。そこには、こう書かれていた。

『兄さんとナスターシャへ。この手紙を読んでいるということは、僕が出奔した後だと思う。昨日　まあ、読んでいる日にもよるね。僕が出奔する前日に二人に別々に話をしたんだけど、その結果、僕がいないほうが色々な問題がないことが分かった。それに、兄さんとの家督争いっていうのもしたくないからね。まあ、家を出奔したのは申し訳ないけど、そろそろ派閥争いが本格化しそうだからね。僕としては兄さんやナスターシャが幸せならそれでいいかな？　とりあえず、ふたり仲良くね？　僕は僕で生きて行くさ。それじゃあ、お幸せにね？　健二』

それは勝手にもほどがある手紙だった。全て自分で考えて自分が『これでいいだろう』と勝手に結論づけて残された者の事など考えずに行動した結果の手紙。だが、分かるのは『兄弟で争いたくない』という気持ちと『兄の幸せを願う』という弟の気持ち。

そして、出奔した弟が幸せであるようにと妻となったナスターシャと祈っていた。部下を使って秘密裏に調べていた。だが、健二自身が情報を改ざんしていたため、ようやく足取りがつかめた時には、先日の飛行機テロで死亡したことで絶望した。だが、息子が居た。最近、東京の裏路地に身元不明の子どもが現れた。何でも噂では、先日起こった飛行機テロの生き残りらしい。その情報を聞き、駆けつけた。そこに居たのは、弟の面影を遺した桂だった。

結局、弟の結婚を祝うことも出奔した時の恨みを晴らすこともできなかった。だから、せめて弟夫婦の忘れ形見を引きとって自立できるまで育てようと思った。そして、桂の才能に気づき、桂を次期当主候補に挙げたのだ。

「……桂には悪いが、出来ればあいつに『楯無』を継いで欲しい」

そうすれば、自分たち兄弟のような事は起こらない。自分の娘達が険悪な仲になることもない

「勝手だな」

そして、それが確率の低い願いである事も理解している。多分なのだが、桂はしばらくすればここを出ていきそうな気がする。今は、娘たちの世話が楽しいようで色々教えているが、それも一段落つけば「はみ出し者」を自称しているのだ。ここを出て行くだろう。

「なら…その時に便宜をはかるのもいいかもな」

それならそれでいいかも知れない。その時は…まあ、後悔しないようにはしたい。楯無はそう思っていた。

しかし、この数年後に一人の天災により世界のパワーバランスが崩れ、世界が変革し、桂もある任務で片腕を失う事件が起きることになった。

第2話 流されて更識（後書き）

とりあえず、現状の確認的な話。

というか、あれですね。HDクラッシュして数日経ちましたが、何というかクラッシュしたというのを実感しても「ああ…そうか」という賢者モードみたいな思考になりましたね。

とりあえず、クリスマス用の短編を幾つか考えてモチベ回復を図ろうと思います。

第3話 『白騎士事件』の存在による雑事

「はあい！ レッツルッキン！ 次のうち仲間はずれはどれでしょう！」

桂が示したボードには四つの絵が書かれていた。ライオンと人間とサメとスズメ。桂は現在、妹である玉櫛と簪、そのお付きである布仏虚と本音姉妹相手に遊んでいた。

「えっと…サメですか？ それ以外は陸上に住んでいるし」

「虚ちゃん……惜しい！ 正解は人間です。人間以外は食べます」

「……え？」「……」

「ぶつちやけるとスズメも食べないことはない。ただ、人間はなあ」

「あの……兄さん？」

「ちなみに、スズメはしっかりと焼かないとだめだぞ？」

「あの……桂さん。別に誰も聞いていませんよ？」

スズメの調理法に話がシフトした桂を見ながら四人の幼女は大量に汗をかいていた。このままここにいと知ってはいけないことを知っていきそうになる。

ちなみに、桂は性格が変わった。以前は、寡黙で物静かだったのだがいつの間にか飄々とノリが軽くなった。楯無は理由を「人と触れ合ったから」と推測していたのだが、実際は違うようである。

「桂。少しいいか？」

「ん？ 今、サバイバル知識の伝授を「任務だ」…了解」

「……（助かったー！）」「……」

四人の幼女は揃って息を吐いていた。それをみて桂は「るー」と泣いていた。

「さて、仕事というのはIS関係のことだ」

楯無に連れられてやってきた部屋。そこで、告げられたのは日本政府から「IS開発者である篠ノ之束の『数少ない』親友である織斑千冬とその家族の護衛」という依頼だった。

「で？　なんで、俺にお鉢が回ってきたんです？」

桂は基本的に単独行動を取っている。他の構成員との折り合いが悪いのもあるし、何より桂自身が単独行動によるゲリラ戦術を得意とするためである。

「うむ。実は、織斑千冬からの指名らしいぞ？　お前…生きていたこと伝えていなかったんだらう？」

「あゝ。ということは、束が調べていたか」

自分が生きていたことを千冬たちに伝えていなかったのは、特別な事情があるわけでもなくただ「忘れていた」というだけ。

「まあ、ご指名ならやりましようかね。ちなみに、銃火器の使用は？」

「……ナイフのみだ」

さすがに銃火器はごまかしが効かないらしい。それくらいやってくればいいのにも思いながらも準備をするために部屋を出て行く桂。

数ヶ月前に世界を変えた「IS インフィニット・ストラトス」と呼ばれるマルチフォームスーツ。それを発表したのは、幼なじみの束だった。桂は要人警護の任務でその発表の場に居たのだが、簡単な説明を受けているうちにISがどのようなものか分かった。

「まさか、母さんに見せていた設計図があれとはね……」

母親の病室で試行錯誤していた設計図の完成形。それがIS。となると、その数日後に起こったハッキングにより日本に放たれた大量のミサイルとそれを鎮圧したIS『白騎士』を捕獲しようとした各

国軍との戦闘の総称である『白騎士事件』の白騎士は　　。

「千冬だな。つーか、あのバカども。やるのは勝手だが、後始末をするのは俺たち暗部なんだよ」

日本に飛来したミサイル。白騎士により半数を撃ち落されたが、残りを落としたのは『更識』や自衛隊。とにかく、フレアやらなんやらをばらまいてミサイルを爆破していったのだ。

「それを千冬のバカが……」

自衛隊の戦闘機がフレアをばらまくために白騎士を通りすぎようとした際に翼を切り落としたのだ。幸いにもミサイルが着弾したのは開発中だった臨海エリアだったため人的被害は無かった。状況が状況のため仕方ないのかも知れないが、それならばそんな事件を起すなど言いたい。

「それで助けを求めるか……ま、金さえ貰えればなんでもいいか」

桂は部屋に戻ると装備を整えて歩き出した。途中で、仲の良い連中から土産を頼まれつつ屋敷を後にした。

「んで？ 満足か？ こんな世界で」

「……分からない」

織斑家に向かうと、そこに群がっていたマスコミなどを「脅して」帰らせると家の中に入り、千冬との会話を始めた。

「お前らに色々言いたいことはあるが……俺は公私混同はしない主義なんぞな」

そう言つて、盗聴器などが仕掛けられていないかをチェックし始めた桂。千冬はその背中をただ見ていることしかできなかった。

「……これからお前と束はツケを払うことになる。世界を変えたんだ。尊敬されることもあれば恨まれることもある。それを理解することだな」

「……お前は？」

それは一連の騒動で理解した。だが、聞きたかった。桂はどう思っているのか？　ISを開発したことをどう思っているのか。仮にも桂の母親が関与しているのだ。それを聞きたかった。

「別に？　俺は世界から弾かれたからな。人権も、今話題になっている女尊男卑の風潮もどうでもいい」

飛行機テロでたった一人生き残った事、その後戸籍がないまま裏の世界で生きてきたこと、『更識』での立場。その他様々なものが桂に『世界から弾かれている』と判断させた。

「と、というより、聞くくらいならするな」

盗聴器をいくつか回収し、それを一つ一つこの諜報機関が設置したのかを調べながら会話をする。桂の中では千冬たちが世界を変えたことをとやかかくいうつもりはない。ただ、自分たちの仕事が増えたので文句を云っているのだ。

「まあ…なんかあったら言えればいい。幼なじみということでも格安で色々引き受けよう。汚れ仕事から何からな。あ、それと俺はもうそろそろ外国行くから」

「どついつ事だ？ 『更識』を抜けるのか？」

そもそも暗部組織から離脱することができなのか不明なのだが、桂は近いうちに再び姿を消すと言っているのだ。

「日本に戻ってくるときに世話になった人が、今度設立されるIS委員会の理事になったからな。直下のエージェントとしてスカウトされているんだよ」

ISの管理などを目的として設立されるIS委員会。世界から集められた各国代表より構成される委員会。その委員会のイギリス代表として選出されたアイザック・アルバートからスカウトを受けている。元々はドイツの企業の社長だったが、IS台頭による情勢変化を察知し、職を辞して母国であるイギリスに帰還。その後は、知り合いのツテで諜報機関やらイギリス王室直下の警備隊などを流れ歩いてその才覚を認められて委員会への代表に選出された。

「なんつーか、気に入られていてな？」

日本に戻ってくるときはイギリスに戻る直前だったらしく、その後も連絡を取り合い色々融通してもらった。思えば『更識』よりも強固なコネを作れた気がする。

「『更識』での俺の立ち位置は「家を捨てた宗家の落ちこぼれの息子」だからな。居心地が悪いのよ」

無論、父親が落ちこぼれということは絶対にありえない。むしろ、『更識』から逃げ続けていた点を見れば十分すぎるだろう。

「義理の妹もできたが……どーも、組織に縛られるのは面倒だと感じた」

その点、アイザックは「目的のためなら人質もとるし、暗殺もする」男。ソッチの方が良さそうだ。無論、玉櫛たちが可愛くないわけではない。だが、どうにも『合わない』のだ。それはやはり、世界から『弾かれた』と感じたあの飛行機テロの事件がきっかけなのだろうと判断していた。

「どうせ死ぬはずだった人生。自分の好きなように生きなけりや損だろ。お前もそのくらいの考えていけばいいんじゃない？」

「できるわけがないッ！　一夏もいる……」

「ブラコンもいいけど……ま、言わないでおこうか」

桂は昔から千冬はブラコンだと思っていた。といっても、昔は両親

がない故の過保護さと判断していた。しかし、今は千冬は一夏に依存しているように思える。恐らくは、一連のIS関連の自体で追い詰められているのだろう。

「とりあえず、少しは一夏を　　ッ！　伏せる千冬！」

「え？」

殺気を感じた桂は千冬を押し倒した。そして、そこに撃ち込まれたのは銃弾。入ってきたのは一人の人影。見た感じ、訓練された軍人のようである。その男はライフル銃を持っている。装備がナイフしかない桂は状況の悪さを呪った。

「チツ、どういう事だ？　周囲は各国の諜報機関が固めていたはずだろうが！」

「桂、それは本当なのか？」

桂の毒づく声に千冬が声をあげる。桂は、腰からナイフを取り出すのと同時に懐の携帯から『更識』へと緊急事態を告げる通信を送る。

「当たり前だろうが！　お前と束が『白騎士事件』の首謀者だというのは各国上層部の共通見解だ。あんまり『国家』をナメるな！」

「織斑千冬…貴様のせいで私の妻がア！」

男はそう叫び、ライフルを千冬へと向けた。幸いにも、桂が抱えて飛び退いたおかげで千冬に怪我はなかったが、千冬は完全に恐慌状態に陥っていた。桂が殴って気絶させたため声はすぐにおさまったが、桂は内心そうしておいてよかったと感じた。

「おおかた、どっかで『白騎士事件』の真相を知ったか。そういや、ミサイル着弾の衝撃で階段を降りていた妊婦が転落して胎児共々死んだとか聞いたな…その遺族か」

「そうだ…その女のせいで！」

ミサイル着弾地点の数キロ先にあった団地地帯。衝撃というよりも、ミサイル落下の音に驚いて怪我をした人間が結構な数居たのだ。『白騎士事件』のインパクトが強かったため公には知らされていない事実。

「まあ、アンタの身の上にも思うことは色々あるが…悪いな。こいつを殺させるわけにはいかないんだよ」

「何故だ！？ そんな女を生かしておく必要がどこにある？」

「そんなん知らんがな。こっちは命令を受けているんだから」

桂は周囲にいるはずである各国諜報機関の人間を本気で呪いたくなってきた。

「各国諜報機関が動かないのは……装備がないからということにしておこう。考えるのは面倒だ」

篠ノ之束への脅しのためなど大体の予想は付いているが、今は千冬を守るのが最優先されるべき事項。しかし、ライフル相手にナイフで挑むのは。

「さすがに分が悪いな……しかも、あのおっさんもう錯乱状態だろ」

「妻の……娘の仇だ！」

しかも、こちらには千冬がいる。戦いにくいにもほどがある。

「つーか、CIAでもGSG-9でもいいから仕事しろよ。目の前で人が死にそうに……無理だな。そんな自国の不利益にしかならぬいことをするわけがねえ」

最悪、腕の一本でも犠牲にするしかない。というより、さっさと片付けなければ援軍が来たときに不測の事態が起こる可能性が高い。例えば、錯乱した男がライフルを乱射など。

「ま、なるようにならあね！」

「死ねえ！」

桂に気絶させられた千冬が目を覚ましたのは銃声だった。目を開くと目の前にボトリと落ちてきた左腕。顔を上げると、男の喉にナイフを突き立てている『左腕がない』桂だった。

「妻の……子供の仇を……」

「ハッ………知るかよ」

「あ
」

千冬は男を殺してその場に崩れ落ちる桂の姿だけを見ていた。

目につくのは『赤』

第3話 『白騎士事件』の存在による雑事（後書き）

次回より、主人公が本格的に動きます。

白騎士事件の裏側についてはまあ、捏造です。そして、千冬さんは原作より弱体化します。能力ではなくメンタル的に。

ちなみに、ヒロインはMを^{ドラ}カ預定しているんですが、シャルもいれて二人のヒロインにしようかなと思っっている作者です。だって、シャルもある意味ねえ？

第4話 流れ流れてアイザック

「行くのか？」

「ああ。元々、そろそろここから離れるつもりだったしな。心配しなくても、パトロンはいるさ」

簡単な荷物を持ち、トレンチコートを着ている桂は、屋敷の廊下で楯無と会話をしていた。

「元々俺の『更識』入りは歓迎されていなかった。そんなときに俺が左腕を失った。追い出すにはいい口実じゃないのか？」

任務を失敗したわけでもない。むしろ、織斑千冬の護衛という任務は完全に果たしている。しかし、古参の人間は納得しなかった。というより、難癖をつけて桂を追いだそうとしているのだ。

「まあ、あの爺どもにとつちゃ俺は邪魔者だろう。どうせ玉櫛の後ろ盾にして利益を得たいんだらうよ」

「情けないな。いや、組織が腐敗するのは当然か」

要するに桂は邪魔なのだ。日本政府からも桂を指名してくる者もいる。有能すぎる桂の手綱を取ることが難しいと判断した更識の幹部は今だ子供の玉櫛を次の楯無としようとしている。

「まあ、玉櫛がそんなタマじゃないのは分かるけどな」

「あの子は聡いからな。いずれ爺様共も思い知るだろうよ」

二人してくつくつと笑う。老獺と言えば聞こえはいいが、所詮は自分の利益を守ろうとしている老害である。ひとしきり笑うと桂は存在しない左腕を一瞥すると鞆を持ち歩き出した。

「すまん。だが、何かあれば言ってくれ。私に出来る範囲で協力する」

「いって。アンタは嫁さんと娘を守ればいいんだよ。男一人、適当に生きていけるさ」

何より一国の暗部組織に過ぎない『更識』よりも強大な人間の専属エージェントになれるのだ。それこそ難癖をつけてきた女など逆に牢屋にぶち込めるだけの権力を持った人間の専属エージェントに。

「それじゃあ、玉櫛たちには適当に言っておいてくれ。まあ、そんなに深く付き合っていなかったから大丈夫だろうけどな」

そう言い残し桂は闇夜にまぎれて『更識』より姿を消した。

「そう思っているのはお前だけだよ。玉櫛も簪も、虚も本音もお前を目標にしていたのだ」

確かに、実際に会ったのは数えるほどだろう。しかし、彼女たちはその数回で桂の能力などを見抜き、目標としていた。

「時間が重要ではない。密度が重要なのだよ。しかし…これは玉櫛たちが暴れそうだな。いや、それはそれでいいのか？」

桂を尊敬していた玉櫛が『楯無』となればどうなるか。老害どもはもう少し『若者の考え』を理解するべきだろう。

「しかし、情け無いにもほどがあるな私は」

また止めることはできなかった。弟の時よりも前進はしていたが、結局行かせてしまった。本当に馬鹿な男だ。楯無がそう自嘲するところからか声が聞こえてきた。

『まあ…桂はああいう子だからねえ。組織に縛られるより、個人のエンジニアとして動いたほうがいいでしょ。だから、気にしなくてもいいよ』

「……そう、か」

幻聴かもしれないが弟の声が聞こえてきた。だが、楯無はそれが幻聴ではないと確信していた。

「……んで？　これ何よ？」

「義手だ。ISの技術やその他諸々の技術を使った特製のな」

『更識』を後にした桂は数ヶ月中国の崑崙山にて修行を行った後、イギリスはロンドンにいた。パトロンにして上司であるIS委員会イギリス理事のアイザックと久しぶりの対面を果たしていたのだが、そのなかでアイザックに渡された物。それは、如何にも『機械の腕』と呼ぶにふさわしい義手だった。

「もちろん、お前にもその義手を接続するための手術を受けてもらう必要があるがどうする？」

「面白そうじゃん。やってくれ」

「フツ。お前ならそういうと思っていたよ」

その手術は数時間にも及んだが、桂は手術後も寝ることもなく義手の調子を見ていた。

「結構…いい感じだな。フーか、触覚がないのを除けば生の腕より調子がいいかも知れないな」

「一応、現時点での世界最高レベルの技術を使用しているからな」

桂の賞賛にアイザックは事実を告げる。そして、その義手をおくってきたのは篠ノ之束だと。

「どづいう事だ？」

「まあ、お詫びだそうだ」

曰く、自分の見通しが甘かったせいで左腕を失うことになった桂へのお詫び。桂は思うこともあったが、もらえるものはもらう主義なので素直に感謝しておいた。

「ちなみに、その義手は多種多様な運用を視野に入れて作られている。専用のカートリッジで変形するらしいぞ？」

「ほー。基本形態はこの状態か」

「お前が会得したという『電磁発勁』を補助するためのダイナモ。及びそれを利用したソナーや発熱装置。それが基本の状態だ」

中国の崑崙山に居た老人に教えてもらった『電磁発勁』はISの絶対防御すら透過する技だった。ただし、左腕を失ったことによる人体の気が流れる道『経絡』や気の流れ自体が乱れているため、使用すれば体への反動があるものだった。そのため、それを補助するブ

「スターとしてのダイナモが装備されている。

「地上戦・至近距離ならばISを破壊できるお前の能力を腐らせるわけにはいかないんでな」

「だろうね」

ISに触れなければならないとはいえ、ISを破壊できる術を持つ桂。その戦力を有するアイザックは自身の目的を桂に話し始めた。桂を完全に協力者とするために。

「私は今の女尊男卑を変えたいのだ。軍内の再編が行われたのは時代の流れだ。しかし、それに伴う女尊男卑の風潮は変えなければならぬ」

アイザックはISが世に出たのは運命だと思っている。かつて、戦車がより高性能の戦車に取って変わられたように、新人が旧人を駆逐して分布を広げたように。

「だが、片方がもう片方を隷属するという状況……実に似ていないか？ かつてのドイツによるユダヤ人迫害のように。アメリカに入植した白人が先住民を壊滅させたように」

「つまり、今の『男が女に隷属している』状況を改善するのかわ？」

「うむ。協力してくれるか？ もし、協力してくれるのならば……私の全てを持ってお前の願いをかなえてやる」

アイザックは子爵家の次男。家自体は兄が継いでいるが、兄弟仲はよく『手段を選ばない神算鬼謀』とイギリス国内で恐れられているアイザックをして「兄上は：私以上の策略家だよ。自覚はないだろうがね」と言われるほどの「お人好し」の兄のサポートがある。そしてなによりアイザック自身がそれだけの権力を持っている。恐らく、大半のことは実現可能だろう。

「……へっ。面白い。のってやるよ。俺の望みはそんなにない。なんか頼みごとがあつたらそれを出来る範囲で叶えてくれるだけでいいさ」

「ふむ……欲が少ないな」

「なんかさあ……一度死にかけたせいかな？ 必要以上の物欲とかが薄いよ」

「……まあ、いいがね」

どうせいずれ『欲望』が強くなるだろう。例えば、『同類』を見つけた時とか。とりあえずは、大事な部下にして協力者の意向を叶えることを優先させた。桂が頼んだ『ISと斬り合っても欠けることのない日本刀』を造らせるために。

「兄さんが、ねえ」

それは少し時を遡る。桂が『更識』を抜けたと自分の従者と妹とその従者に父親から知らされた事実。その時に父親から桂が消えた理由を聞いた。

「ふうん…そつかあ……自分たちの利益がなくなるからかあ……」

「お、お姉ちゃん？」

怯えるような妹の声に気づいたのか玉櫛はすぐに表情を戻し、簪の頭を撫で始めた。

「大丈夫。かんちゃんはお姉ちゃんが守るから」

そして、自分の従者とその妹にも微笑を見せる。何も心配はいらないのだと告げるように。しかし、その内心はマグマのように煮え立っていた。

「（兄さんを排斥するなんて…ただ後ろで指示を出すしかできない老害がやってくれるじゃない。暗部組織が優先すべきは能力でしょ）」

義兄が行なってきた任務は自分が成長してISを所有したとしても実行出来るか怪しい。父親が連れてきた義兄。義兄は強かった。そんな義兄に憧れたし、義兄が『楯無』となったらそのもとの存分に力を振るいたいとも思った。だが、それももう叶わない。

「でも、私が『楯無』になれば……」

義兄も戻ってこれる。玉櫛はそう考え、簪たちを老害どもから守るためにも力をつけることを決めた。

惜しむらくは、桂自身に『更識』に戻ってくるつもりがないことだ
らう。

第4話 流れ流れてアイザック（後書き）

クリスマス？ 何それ美味しいの？ 自宅で、友達と桃鉄しながらピザ食べますが何か？

さて、ということでもそろそろプロローグも終わります。次回は、メインヒロインの登場です。さて、誰でしょう？

あと、シャルがもう一人のヒロインというのはどうでしょう？

第5話 新天地での初任務

「大将。戸籍一つ用立ててくれ」

「ん？ どうした？」

ある日、アイザックから与えられていた任務を終えた桂が、アイザックがいる屋敷へと戻ってきた。そして、背負っているのは一人の少女。

「ふむ…桂。いくら女に飢えているからと言って「ちげえよ」「そうか」

アイザックはとりあえず、少女が日本人らしいのでそれ用の戸籍を用意しつつ事情を聞き始めた。

「……寒い」

桂は現在、ロシアのツングースカにいた。というのも、アイザックがツングースカにおいて非合法研究所が存在するという情報をつかみ、その研究所の調査をアイザック経由でIS委員会より命ぜられたのだ。

「やっぱりウオツカってロシア人に必要なのがよくわかったわ」

スキットルに入ったウオツカをちびちびと飲んで、ピロシキを頬張って件の研究所を双眼鏡で見る。

「しかし…あの研究所って何よ？」

あのIS委員会ですら全貌がつかめなかった研究所。桂単独で行動するのも、被害を最小限に抑えたいとの思惑があるのだろう。例えばISでも、室内戦ならばそのアドバンテージは存在せず、ISを触れるだけで破壊できる電磁発動を持つ桂に利がある。

「さてと、行きますか」

白いコートを取り出し、雪原の中を進む桂。少しずつ研究所へと近づいていく。

「……赤外線センサーの類は無し……ソナーにも反応なし」

束が送ってきた義手は凄まじい性能を持っていた。『タケミカヅチ』と名付けられているこの腕は、その名の元となった武甕槌大神の伝承にあるように形や性能を変える義手。現在、桂が使用しているのはソナーやレーダーなど索敵に特化した『レーダーアーム』。単独行動大好きな桂にはうってつけである。

「さてと……行くか」

右手にオートマチックタイプの拳銃を持ち音もなく研究所を駆ける桂。目指すは研究所の中枢。何かしらの情報を持ち帰らなければおまんまの食い上げである。

「つーわけで、死んでくれや」

「モゴッ
」

偶然見つけた研究員らしき男の背後に忍び寄り、腰のホルスターに拳銃をなおすと右手で男の口を塞ぎ、指の部分が鉤爪のように変形した左手でその首を搔っ切り息の根を止めた。

「マジで便利すぎる。これ本当に義手なんだろうな？」

腕型ISなのではと思ってしまっほどに性能がよすぎる義手に驚きながら男の身ぐるみを剥がし始める。IDカードの名前と写真を『レダーアーム』のカメラで撮影しつつソナーで辺りを探る。そして、ある部屋から数人の話し声が聞こえてきた。さすがに内容などは聞こえなかったが、居場所を探るには十分である。

「そんじゃあ…行くか」

拳銃の調子を確認しつつその部屋の前まで移動すると、ソナーで再び音を調べ始めた。

それじゃあ、約束のものだ。

ハッ。男のくせにいい仕事をするじゃねえか。

クックック。

「（丁度研究成果の引渡しの場合か？だが、ロシアが非合法研究をしているという噂はなかったはず。いや、むしろロシアの求心力を低下させる勢力という線もあるか）」

そもそもロシアも多民族連邦国家である。決して一枚岩ではない。そう考えると選択肢は大量にある。

「（まあ、それは俺が考えるべきものではないな）」

あくまで桂はエージェントである。情報の判断などはアイザックが行う。自分は情報を持ち帰るだけ。

ところで、そこにいるネズミは誰だよ！

「……あります。ISを装備していたのかよ」

「ちっちと出してごよー」

そう言われたので鋼鉄の扉を蹴り飛ばして部屋に入った桂。さすがに生身で鋼鉄の扉を蹴り飛ばすのは意外だったのか中に居た三人の男女も目を丸くしていた。

「ちーす。IS委員会のエージェントの高槻桂でござい」

どごそのや 夫のように声をかけた桂はざつと敵を見た。女が二人に老人がひとり。女二人はISを装備していると仮定して、どうやってここから逃げるか考えていたのだが、老人が拳銃をこちらに向けたので、とつさに左腕をレーザーライフルに変形させてその頭を撃ちぬいてしまった。

「ヒューー じゃねえ。やっちまった」

思わずサイコガンを持つ一匹狼の宇宙海賊を称するような声を上げたが、左腕からの光学兵器。あながち間違いでもない。しかし、そのせいで女たちの警戒レベルを跳ね上げてしまったようで二人ともISを展開していた。そのISは両方共『強奪された』IS。

「あ？ アメリカ製の第2世代の『アラクネ』にイギリス製の第1世代『エンフィールド』だな。強奪品をそのまま使うか……ふうむ。ま、室内だしなんとかなるか」

「ナメてんのかテメエ！ 男のくせによお！」

アラクネを装備している女はあからさまに桂を見下しているが、桂はそんな女を冷めた目で見る。

「ああ…アンタ三流か。なら仕方ないわな。んじゃま……テメエらをしよっぴかせてもらっせ」

「んだと!?!」

「男だろうが女だろうが『裏の人間』なら能力で判断するのが常識。つまりそれすらできねえテメエは三流だよ！ ISの名前も『アラクネ』じゃなくて『アバズレ』に変えとけや！」

左腕を通常状態に変形させると、そのまま殴りかかった。といっても、無策ではない。相手が激昂しているからこそ、そして見下しているからこそ桂に分がある。

「紫電掌！」

「んな!?!」

左腕がアラクネの脚に触れた瞬間、脚内部に高圧電流が打ち込まれ、脚は内部から爆発した。通常ならばありえない事態。しかし、アラクネの操縦者は状況をすぐに判断すると僚機に声をかけた。

「エム！ 撤退する。テメエは「足止めをする。こっちはB T兵器がある」わかってんじゃねえか」

アラクネは脚部だけではなく全体に電流が流れたため細部に不具合が出始めた。一方エンフィールドは無傷。足止めには十分だろう。アラクネは天井を破り最高速度で離脱し、エンフィールドは今だ試作型で決して性能がいいとは言えないB T兵器を2基射出すると桂に向け飛ばしたのだが。

「あーらよつと」

桂が左腕を広げると、B T兵器は「磁力に引つ張られる」かのよう
に2基とも左手の中に吸い込まれ、桂により握りつぶされた。

「まあ、鉄製だからな。これも『電磁発動』の応用だ」

左腕を強力な電磁石へと変え、B T兵器を吸い寄せる。エムと呼ばれた少女は桂の底の知れなさに知らずのうちに後ずさっていた。そして、そのような自分に気づきがくぜんとしていた。

「私が……恐れている？」

「まあ、世界は広いからねえ。気にしなくてもいいんじゃないかな？ とりあえず、君捕縛ね」

エムが何かするよりも早く桂が動いた。左腕を床に付けるとエンフイールドが高濃度の電磁パルスが発生したと報告し、システムの大半がダウンしはじめた。

「な……まあ、眠つといてくれや」「え？」

いつの間にか自分の鳩尾に左腕を当てていた桂。次の瞬間、エムの意識は暗転した。

「ん？ 吐血？ 内臓には負担がないように電力調整をしたはずだが……」

吐血どころか耳や鼻からも血が出ている。一応、調べてみるとナノマシンの死骸であることが判明した。

「……持ち帰るか。色々事情を聞かなきゃならんし」

待機状態に戻ったISを回収しつつ、エムを担いで研究所のコンピュータからデータを一気に吸い出す桂。左腕大活躍である。

「そんで今に至る」

「……なるほど。しかし、研究所のデータは微妙だな。非合法ではないといえはそうなんだが、な」

桂が持ち帰った情報は、グレー部分の研究が多く問題がないと上が判断すればそれでお終いになるような情報だった。

「せいぜいこの…^{リムパー}剥離剤か？ コレくらいしか有用なものはないな」

「ふーん。お？ 大将、目を覚ましそつだぞ」

左腕をマシンガンに変形させ、エムに突きつけながら目をさますのを待つ。アイザックはそんな左腕を見て改めて『天災』の技術力の高さを思い知る。

「ん……」

「グッモーニン？ とりあえず、知っていることを全て話してもらおうか」

「…ふむ。桂と同じ身の上か？」

「私は……それに、ここは……」

エムは現状が理解出来ないようで、必死に記憶を探っているようだった。

「それと、お前の体から出てきたナノマシンについても話してもらおうか？」

「え？ ナノマシンが？」

「クソツ…あの糞野郎が…スコール。エムの馬鹿はまだ帰って来ないのか!？」

「ナノマシンの反応がなくなっただわ」

二人の女性が薄暗い部屋で会話をしている。片方は、アラクネに乗っていた女性。その女性は桂への悪態をつきながら傍らに立つ女性スコールに声をかける。そして、返ってきたのはエムに投与していた『首輪』の反応が無くなっているということ。

「おい待ってくれ…それってあの馬鹿が死んだってことか？」

「そうでしょうね。その高槻桂とかいう男……要注意しないとね。オータム」

「分かってるよ。あのヅラ野郎はアタシが殺してやる」

アラクネの操縦者オータムに目をつけられた桂。オータムと再び相まみえるのは数年後の事だ。

「……ん？　今、何か不本意な呼ばれ方をしたような」

「お前意外と余裕だな？」

銃を突きつけつつ何かを察知した桂。こいつも大概である。

第5話 新天地での初任務（後書き）

万能な腕。ライダーマンのカセットアームつか、ガイキングの超兵器ヘッドつか。ところで、なんでライダーマンの腕って左腕から右腕になったのだろうか？ やっぱアクションの関係ですかね？ 別にいいけど。

さて、メインヒロインが出てきました。皆わかったかな！？（棒

基本的にはこの二人で行動します。シャルは現在考え中。シャルはヒロインにしようと思います。そこで質問、お母さんをどうしましょう？ 生存させるならば、アイザックがシャルのお母さんに恋していて〜とかいうストーリーが思い浮かんだのですが……多分、アイザックVSデュノア社長になる……面白そうではあるな。

PS・作者はお酒は結構好きです。出身の関係で芋焼酎が好きですが、カクテルも好きです。飲むのはスクリュードライバーやバラライカなどのウォッカベースが大半です。お酒は二十歳になってからですよ？

12月29日 サイレント・ゼフィルス エンフィールド、その他
修正

第6話 二人のはみ出し者

「私は……マドカ。亡国機業のエージェントだ」

「亡国機業？ 大将、ナチスの残党ってまだ残ってんのか？」

「残ってはいるが、ナチス残党とは限らん。それより、続けてもらおう」

ナノマシンが体から排出されたことで、マドカはなにやら声を上げたがすぐさま冷静になると桂たちの事を聞き、状況を理解したのか投降してきた。そして、現在桂とアイザックにより尋問中である。といっても、マドカ自身が協力的なため食事や飲み物を用意してさながらお茶会である。

「すまない。私は…末端に過ぎないから全貌は知らない。ただ、多国籍の秘密結社だというくらいしか」

何よりマドカ自身が参加して日が浅いため大した情報も持っていないらしい。桂はマドカの顔が干冬と瓜二つなためクローンやその他の問題を考えていたが、どれも推測でしかないため余計な口出しはしなかった。

「まあ、それはいい。貴様はこれからどうする？」

「え？」

「私は駒を必要としている」

アイザックは自身の目的を話した。その上で協力するならば、戸籍も用意するし、所有しているエンフィールドも『強奪』されたというところをもみ消すとも。

「まあ、断ったら地下室行きだな」

そして、待っているのは拷問かもしくは捨て駒としての未来だろう。マドカはそこまで分らないほど馬鹿ではない。

「……わかりました。貴方たちに従います」

選択権など最初からなかったのだが、それを差し引いても破格の条件とも言える。

「ふつ。桂、この少女は「高槻マドカ」として戸籍を作る」

「俺の妹にすんのか？」

「…安心しろ。結婚できるように従兄弟で偽造しておく」

「おいこら」

後の教育などは桂に任せると告げ、アイザックは部屋を出て行った。

「まったく…あのオッサンは……」

アイザックに悪態を付きつつ、マドカに向き直る。

「さて、とりあえず……」『はみ出し者』同士仲良くしようぜ？」「

桂が差し出した右手をマドカはおどおどしながらとった。『すでに死んでいる』桂と『生きている証がない』マドカ。似たもの同士の二人がこの時出会った。

「まあ、やることは変わらないけどね」

「そうなの？」

桂から自分たちの仕事の説明を受けていたマドカ。桂自身も仕事を整理するつもりだったので丁度良かった。ちなみに、今いるのはアイザックの屋敷にある桂の部屋である。桂自身の物欲が薄いためベッドと小型の冷蔵庫、報告書作成用のパソコンを置く机くらいしかない殺風景な部屋。しかし、アイザックより「部屋は監視の目的もあるから相部屋」と言われたため、色々買い足してメイドなどに女用の小物などを買ってきてもらってそれなりにいい部屋になった。

「基本的に、大将…アイザック・アルバートの指示で俺達は動く」

そして、カーペットの上に座ってマドカに説明を始める桂。名目上桂はIS委員会直下特務機関所属のエージェントである。しかし、実態はアイザック専属エージェント。

「まあ、大将自身がIS委員会を手中に収めるつもりらしいんだがな」

「可能なのか？ さすがに…難しいと思うんだが」

「何でも『利権と保身が確保出来れば別に構わない連中』らしいぞ？」

ISで女性の地位は向上し、男性は隷属を余儀なくされている世界になった。しかし、それは一般階級のみ。イギリスならば貴族社会、アメリカならば支配者層といった世界では相変わらずの実力・階級社会。そして、その世界からIS委員会の理事に選出された者たちは利権と保身の手段が確保出来れば構わない。アイザックはそこにつけこんでいるのだ。

「俺の予想では…後数年もしないうちにIS委員会を自分のものにするな」

「……………」

アイザックの「弱み？ 無ければ作れ。目的のためならば手段を選ばぬ」なやり方を知っている桂としてはIS委員会を手中に収めるアイザックの姿が簡単に想像できた。

「まあ、それは置いておいて。俺達の仕事は一言で言えば『何でも屋』だ」

「それはあなたと出会った件からも分かる」

桂と会うことになったロシアの一件。そこから想像できることは正しく『IS委員会の狗』として汚れ仕事などをするということ。まあ、マドカも元秘密結社エージェントとして色々やってきたので別に忌避感はない。

「とりあえず、現時点ではIS関連研究の内偵や要人警護、そして…反動勢力の壊滅などを行う事になる」

ISによる世界情勢への不満を持つ者、ISを使用して国家転覆を狙う者などひとえに反動勢力と言っても無数に存在する。

「とりあえず、俺らの仕事はそんな感じ。他に聞きたいことはあるか？」

「それじゃあ…アラクネの脚を破壊したあの技は一体なんなんだ？」

マドカはずっと気になっていた事を聞いた。ツングースカの研究所

でアラクネの脚部を破壊した技とその左腕。それがどのようなものなのかずっと気になっていた。

「左腕は義手だ。一応「タケミカツチ」という名前だな。篠ノ之東より送られてきた一品だ」

「なるほど…で、あの技は？」

束が作った義手ならば、あそこまで構成のものも納得できた。では、あの技は一体？ マドカは桂に問いかけた。

「技…というか、あれは『電磁発勁』と呼ばれる技を応用した掌底だな」

「電磁発勁？ 気功の一種なのか？」

発勁といえば中国拳法などでよく聞かれる事。マドカ自身そこら辺は詳しくないため「発勁＝気功」という式が出来上がっている。

「ん…まあ、そんな感じでいいわ。とりあえず、俺は生身で電気を発生させることができると考えてくれ」

ぶつちやけ面倒になったため「発勁」気功」で押し通すことにした桂。さつさと説明を済ませようという魂胆らしい。

「本来なら隻腕のせいで経絡などに欠陥があるため体に反動が来るんだが、俺の場合はこの義手に搭載されているブースター代わりのダイナモのおかげで反動なしで使用できる。ちなみに、ISの『絶対防御』すら透過するぞ?」

恐らく『電磁発勁』により発生する電気が生体電流であることなどが関係しているのだろうが、詳しくは分からない。ただ、分かるのはISがどれだけ強化されようとも『電磁発勁』はISに対して絶対的な力を持つということ。

「といっても、だれでも使えるわけではないらしい」

「え? そうなのか?」

桂は、自分に電磁発勁を授けてくれた崑崙山の老人を思い出していた。

若造。お主は…俗世に未練がないのう。俗世から弾かれたと考えているから儂を見つけられたのかも知れんな。どれ、少し手解きをしてやろう。

「……あれ？ あの爺さん、もしかして仙人？」

「貴方は何を言っているんだ？」

あの時は別になんとも思わなかったが、冷静に考えると崑崙山に老人がいるのはおかしい。崑崙山に村でもあれば別だが、わざわざあんなところに村を作るわけがない。

「……そういや、崑崙山って仙界への入り口とかいう説があったな」

となると、あの老人はやはり仙人？ 落ち着いて考えて見れば、呂尚とか名乗っていた。確かそれは太公望の本名だったはず。

「……」

考え込む桂を見つつマドカはふと自身のことを考え始めた。自分は気づいたら『エム』として生かされていた。エンフィールドはある日、自分に与えられた力。

「強いつもりだった」

エンフィールドを使つての『実戦』はツングースカの一件が初めてだった。訓練という名目で使い方や殺し方は分かっていた。実際にどこからか連れてこられた男をエンフィールドで殺したこともあった。しかし、実際に戦ってみればこのとおり。桂が規格外なのはわかるが、自身の経験が少なかつたことも原因だろう。そう考えると桂たちについたのは幸運かもしれない。

アイザックと桂という『規格外』の存在の近くにいれば、もっと強くなることができる。そうすれば、『エム』ではなく『マドカ』として存在できる。

「桂…さん」

「くそ…こんなことなら寶貝の一つでも貰つておけば……お？」

『電磁発勁』というこの科学技術バンザイな世界で絶対的なアドバンテージを持つている技を教えてもらつておきながら、寶貝を貰つておけばよかつたと呟く桂。物欲は薄い方ではなかつたのか？

マドカに声をかけられ、振り向くが「さん」付けは怖気が立つので呼び捨てで構わないと告げるとマドカはあることを質問した。

私は『普通』になれるのか？

マド力は生まれた時から暗い場所に居た。誰にも知られること無く、自分に命令を下す者はいたが表の顔も持っているであろう奴らは自分とは違う。オータムもスコールも理由はどうあれ表から裏にきた人間だろう。でも自分は違う。任務で市街地に出ることがあった。その時、親に手を引かれる同年代の子供を見て羨ましく思った。自分にも親が居たのではないか？もし、いたなら自分は何故ここにいるのだろうか？自分は誰にも受け入れてもらうこと無く死ぬのか。

「普通にはなれねえだろう。お前はもう人を殺しているんだからな」

「そう…だな…「たぐぐし」「え？」」

桂の言葉にうつむいて自分の生まれやこれまでの自分を呪ったが、桂の右手が頭に乘せられ優しい声をかけられた。顔を上げると、そこには桂が優しげな顔で自分を見ていた。

「『幸せ』にはなれるんじゃない？それと…『自分』がわからないなら俺が認めてやるよ。『高槻マド力』として、そして俺の相棒としてな」

「桂……」

桂はマドカに少し寝ておけと告げると部屋を出て行った。残されたマドカは知らずのうちに笑っていた。

「……………桂……………私を認めてくれた？」

「大将」。俺の得物ができたらしいな」

桂は部屋を出て、屋敷の研究室に顔を出していた。桂が頼んでいた刀が完成したと左腕に通信があったのだ。そして、アイザックから渡されたのは日本刀。

「かなり苦勞した。日本の刀鍛冶師の中でも選りすぐりの老人に頼み込んで打ってもらったからな。ISと打ち合っても刃こぼれはし

ないぞ？」

「へえ……ところで、鞘がないようだけど？」

日本刀を持って少し振って調子を見ていた桂がふと鞘がどこにもないのに気づいた。話を聞いてみると、鏢のところにIS技術が使用されているらしく鞘は自動的に生成されるらしい。

「……なるほど。斬殺だけではなく撲殺もできると……棘つけね？」

「むしろ、流体金属で作るのもありだったかもな」

ただ、ビックリドッキリメカ『東博士特製の左腕タケミカツチ』があるため別にいいかと判断した。

「さて、お前とマドカに任務だ。来月開催される『第1回モンド・グロツソ』へ出向く私の護衛だ」

アイザックから渡されたパンフレットにはでかかど千冬の空を舞う姿が載っていた。

「ふーん……優勝候補の日本代表織斑千冬』ねえ……」

千冬の簡単な紹介が載っていた。そこには、『実弾系ライフルを持つ相手には苦戦する傾向がある。そこをどうするかがポイント』と書かれていた。

第6話 二人のはみ出し者（後書き）

マドカちゃんヤンデレに覚醒？

マドカの出自とかは本編入る前に設定集を書くつもりなので、そこ
まで待っていてください。ちなみに、マドカは楯無（玉櫛）と同じ
年の予定。

今回は、千冬メインになると思います。

PS・シャルはヒロインに確定しました。ただ、下手すりゃマドカ
と同じように病むかも……あれ？ 問題なくね？

12月29日 サイレント・ゼフィルス エンフィールド、その他

修正

第7話 モンド・グロツソにて 前

IS版オリンピックともいえる『モンド・グロツソ』がアメリカで開催された。そしてその会場には来賓客としてIS委員会や各国の重鎮がやってきていた。その中で異彩を放つ存在が一人。

「あれが…イギリスのハイエナか」

IS委員会の理事のほとんどが60代という高齢者の中、たった一人30代のアイザック。若くしてその地位についたアイザックには色々後ろ暗い噂がついてまわっていた。

『目的のためならば手段を選ばず、弱みを見せればそこにつけ込み弱みがなければ作るハイエナのような男』と諸外国では称されている。実際、そのとおりなのだがそれを『噂』にまで誤魔化しているのだからアイザックの手腕が分かるところである。

「大将、随分、恨まれてんな？」

「フツ。弱みがなければ作る云々は、それだけ怪しいことをしているからだろ。言うておくが、弱みを作ると言ってもありもしないスキャンダルをでっち上げるくらいだぞ？　そこから大騒ぎして実

は真実だったと自滅した連中の責任まで取れるかよ」

「カツカツカツ。そりゃそうだわな。つーか、後ろ暗い事してなけりゃ付け入られることもないわ」

「……二人とも黒いなあ」

アイザックの左に立つのは黒いハイネックの上にロングコートを羽織り、右手に鞘に入った日本刀。銘は『壱式斬刀』を担ぎながら笑うサングラスをかけた桂。普通は、このような場にこれ見よがしな武器を持ち込むのはご法度なのだが、ISは待機状態にすればアクセサリーと変わらないため、暗殺には持つてこいの道具なのだ。その警戒のため、IS委員会理事の護衛は牽制のため見えるところに武器を持つものもいた。一応、理由も「IS反動勢力への警戒」などで誤魔化せる。

マドカはメガネをかけて決して派手ではないスーツに身を包み外見はアイザックの秘書とも見える。だが、実際はメガネが待機状態のエンフィールドのため桂と同じくアイザックの護衛である。

「さて……そろそろ試合が始まるな。桂、マドカ。行くぞ」

「いっしょ」

「はい」

周りからの畏怖、または尊敬の視線を受けながらアイザックは観戦ルームへと向かう。

「ん？ 尊敬の視線ってなんぞ？」

「しらののか？ 一応、これでもCIAの長官とさし飲みする仲間だが？」

「すごいですね……」

「……あ、もしかしてあのメガネのおっさんか？ いやぁ実におもしろいオッサンだった」

「そうそう。あのメガネだ。ちなみに、プライベートでは娘を溺愛

しているぞ?。」

「……(〓 〓 :)」

ハツハツハツと笑いながらアイザックたちは廊下を進む。マドカはそんな二人を遠い目で見ていただけだった。

モンド・グロツソにおいて優勝候補の一角とされる日本代表織斑千冬専用機である『暮桜』を纏い空に浮かんでいた。

『では、日本代表織斑千冬対アメリカ代表ナターシャ・ファリスの試合を始めます!』

レフェリーの言葉と共に試合が開始された。この試合は、純粹な実力をはかる実戦形式の試合。そして、モンド・グロッソの一番の目玉でもある。

「行くわよ!」

「チッ」

試合開始と共にナターシャはレーザーライフルを千冬に向けて放った。尤も、それはテレフォンパンチに近いものだったので普通に避けられる。

「さて…どうするか」

千冬の暮桜は、左腕にレーザーガンを取り付けているが真骨頂は主武装である雪片による近接戦闘。つまり、近づかなければ有効打はあたえることができない。普通なら難しい。しかし、千冬は独自にあみ出した『瞬間加速』と名付けた機動がある。それを使えば

「嘘!？」

「貰ったぞ」

急加速・急停止を繰り返すことにより相手を攪乱しつつ距離を詰めるこの技。この技と自身の剣の腕で千冬はこの地位まで上り詰めた。

「……って、簡単にやられるわけ無いでしょうが！」

「ひっ!?!」

ナターシャが呼び出したのは『実弾ライフル』。それを千冬に向けると彼女は小さく悲鳴を上げ後ろに飛び退き詰めた距離を再び広げてしまう。そして、千冬は先程までとは違い荒く息を吐いて脂汗も掻いている。

「……織斑千冬は実弾ライフルに何かしらのトラウマがある。噂は本当だったのね」

「なに…を」

以前、桂が読んでいた雑誌にも書かれていたとおり千冬は実弾ライフルを持つ相手には総じて辛勝である。そこから各国IS操縦者は調べ始めた。そして、その結果千冬は何かしらのトラウマがあることに気づいた。

「理由は分からないけど…こっちも負けるわけにはいかないの。ゴメンね？」

「ナメ……るな」

それは一瞬だった。『瞬間加速』で一気に懐に入った千冬は個々のISが発現する単一仕様能力『零落白夜』を発動させ、ナイターシャを一刀のもとに斬り伏せた。

「トラウマあるのは事実だ。だが…それで私は止まってはいけないんだ。証明しなければならぬのだ…アイツが…桂が腕を代償に助けた私はこれだけの価値があるのだと」

対象のエネルギーを全て消滅させる『零落白夜』は『電磁発動』とはまた違う意味でISに対して絶対的能力を持つ。それをどう扱うかが千冬が勝利する条件。

そして、千冬は負けるわけにはいかない。『織斑千冬』という存在は桂が腕を犠牲にして守っただけの価値があるのだと証明しなければならぬから。

「先輩！ さすがです！」

「山田君、か。すまない…少し一人にしてくれ」

千冬は一人ロッカールームに籠った。千冬のサポートをしていた山田真耶は目をぱちくりさせながらロッカールームの入り口を見ていた。しかし、すすり泣く声が聞こえてきたため一気に混乱していた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

誰かに謝る声。真耶は一瞬ロッカールームにはいるうかと考えたが、頭を振ると静かにその場を離れた。

「私が…馬鹿だったから」

千冬は自分の体を抱きしめながら桂へと懺悔する。自分が、自分たちが後さき考えずに世界を変えたから。

目を閉じれば『あの時』の事が鮮明に浮かぶ。目の前に飛んできた腕。ナイフを首に突き立てられ壁を染めるほどの血を吹出す男。そして、床にたまった血の海に崩れ落ちる桂。そして、入ってきたのは桂の知り合いと思わしき男たち。桂の容態を知ることすら無く千冬は警察へと連れて行かれた。数時間後には、一夏も連れてこられない。そして、知ったのは自分たちがとても危うい場所にいるということ。

だから、力を求めた。一夏と自分を守れるだけの力を。しかし、強くなればなるほど一夏とは離れ、そして『あの時』の事が頭の片隅から離れない。多分、これは罪。自分への罰。桂が現在どうしているのかは知らない。会って謝りたい。でも、それはできない。自分のいる立場が、そしてなにより自分が許さない。だから、ずっとこの罪を背負っていかなければならない。

「……織斑千冬は……私と同じ顔？ え？ じゃあ……私は……？」

「桂」

「あいよ〜」

千冬の試合を感染していた桂たち。しかし、途中からマドカの様子

がおかしくなった。ふらふらと部屋を出て行った。桂がその後を追っていったので大事には至らないだろう。

「（まあ、桂がどれだけ『依存』させるかで今後が決まるな）」

アイザックはマドカの事を評価はしているが、これで桂が『依存』させるまでマドカを手中に収めることが出来れば今後の命令もしやすくなる。

「（だが……色々とありそうだな）」

マドカと千冬の顔が瓜二つなのはアイザックも気づいていた。恐らく、そこには自分が知らない何かがある。

第7話 モンド・グロツソにて 前（後書き）

千冬さんは、実弾ライフル銃にトラウマ持ちです。勝ちはずですが、その後数時間は戦えない。このトラウマは桂が上手く立ち回れば克服しますが……無理でしょう。

次は、マドカになりますね。その後は、少し時間が飛んで一夏誘拐事件のあたりになるかも。

指摘を受けまして、サイレント・ゼフィルスからエンフィールドにIS名称が変わりました。でも、原作に近くなるとサイレント・ゼフィルスになると思います。

ところで、自分が書いているISのSS「これが私のお兄様」「三匹が行く」「とあるはみ出し者の物語」のオリキャラたちを一箇所に集めてみた短編を書いてみたのですが……はつきり言って世界征服できるレベルになりました（＝；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4017z/>

IS～インフィニット・ストラトス～ とあるはみ出し者の物語

2011年12月29日13時49分発行